

## 近代（文学）と近代（教育）との相克

キーワード: 日本文学協会 田中実 近代

広島大学 難波博孝

1. わたしはなぜ一旦日本文学協会から離れた(離された)のか

私が日本文学協会に関わる、あるいは、田中実氏に関わる仕事をしたのは、2003年ぐらいまででした。それまでは、『日本文学』や『日文協 国語教育』に書いたり、田中実氏が編集された単行本に文章を書いたりしていました。当時私は一所懸命、文学教育批判を書いていました。しかし、私の真意はほとんど理解されていませんでした。

2003年ぐらいから原稿依頼も少なくなってきました。私自身も、距離を置きたくなってきました。なにに距離を置きたかったか。それは、外から見ていると、日本文学協会国語教育部会がますます「田中チルドレン」の集まりに見えているということに対して内部の人々が無頓着であることから、でした。そして決定的だったのは、「田中実理論の用語集を出すから原稿を書いて欲しい」という依頼があったことでした。これはいけない、とすぐに思い、依頼を断らせていただきました。

このままいくと、田中実理論はますます受け入れられなくなると思いました。そして、私はもういいや、と思っていたのです。

2. では、なぜ私はここにいるのか

そのような私がなぜこの場所に立っている(座っている)のでしょうか。

私は、中高の教員と勉強会をしています。15年続いている小学校の勉強会とは違い、こちらの勉強会はまだ4年目ぐらいの歴史の浅いものです。この勉強会は、予備校の教員と小論文添削のエキスパートと私の3人で主宰しているというおもしろいものです。「教師の学校」といいます。

この「教師の学校」で、たまたま田中実氏の論文や編集した書籍をテキストとして読んでいました。案の定、「わからない」「実際の現場に役立たない」といった声が会に満ち満ちました。しかし、会員の顔は楽しそうなのです。大澤真幸の本をテキストにして読んでいる時に比べれば雲泥の差でした。

私は思いました。「やはり田中理論は魅力(魔力)があるのだな」。この会にいるメンバーはおもしろいことに教育学部出身者はほとんどいません。文学部出身者が圧倒的に多いのです。そのあたりも、おもしろがられた原因かもしれません。

私は、「このまま田中実理論を埋没させてはいけないな。」と考えました。ではどうするか。私の以前の戦略は、文学教育について、斜めから批判することで、逆に文学教育の重要性と現在の学校制度、「教科国語」の中での文学教育の不可能性を言うことでした。しかし、このことはほとんど理解されていませんでした。かえって、私を含めた批判者に対して、田中チルドレンが過剰な防御をしていくように見える結果を生み出しました。

今回の私の戦略は、田中理論を徹底的に聞き取り、誤解することだ、と考えました。まずは、田中氏をお呼びしてその考えを徹底的に聞き取ろう、そして、それを自分たちの言葉に置き換えていこうと考えたのです。自分たちの言葉に置き換えるとは、つまり、理解することです。理解することは、誤解することです。なにしろ、「還元不可能な複数性」なのですから、田中理論なり田中氏の考えなりは、到達不可能な他者です。どんどん誤解を怖れないで自分たちの言葉にしていこうと考えました。

そしてその戦略を胸に、田中氏を広島に二回お呼びして話を徹底的に聞きました(合計5時間ぐらいになったかしら)。このことが、今日のこの場に私がいることへとつながっています。

しかし、私がここにおいて感じることは、「この戦略は間違っていないけれど、なかなか困難なんだ、そして、その困難さこそが、いろいろなことの原因なんだ」ということでした。

3. 田中実理論の困難

田中実氏の理論は、一見シンプルです。そして近代小説・近代物語全般に及ぶ、文学についてのグランドセオリーです。多くの文学研究者が、ある作品・ある作家の研究から一步も出ず、結果と

して、国語科教育の内容学にはなれないという事態（逆に言えば、彼らは、国語科教育の内容学になることを拒むからこそ、個々の作品や作家に閉じこもることができる、とも言えます）と比べれば、その差は歴然です。田中理論は、特に中等国語科教育における文学教育の内容学になりうる、現在のところ唯一の希望といえます。

しかし、その理論を具体的な作品（教材）にあてはめようとする、途端に難しくなります。「近代小説＝物語＋＜語り手＞の自己表出」という図式はとてもシンプルです。では、「羅生門」における＜語り手＞とは何？「語り手」とは異なる？なぜ違う？その＜語り手＞はどんな自己表出をしているというの？それはどこからわかるの？そんな疑問が次々起こります。

そこで田中氏の著作を読みます。すると、ますますわからなくなるのです（笑）。田中氏の知的バックグラウンドに圧倒されるだけになってしまうのです。それでも自分なりに作品（教材）研究を試みようとするのですが、そのような試みをした「田中チルドレン」が、田中氏に叱られている（ここが甘いとか弱いとか）文章を読むと、二の足が出なくなります。

そこで、田中氏の理論あるいは作品研究をそのまま教材研究や授業づくりに使って授業しようと考えます。でもそうすると、「教材分析的授業」になってしまいがちです。学習者と教師とで「教材分析」あるいは「作品分析」をしていく授業のようになってしまうのです。

田中実理論を自分の言葉にすること、その困難は、その理論を具体的に展開するときにとんどん先が見えなくなる困難でした。こうなると、すべての答えは田中氏にあるような気がしてきます。少なくとも、私はそうです。全ての教材について、田中氏の考えを聞き、それから、自分なりの解釈を試みた後で、また田中氏に評価を仰ぎたい、そのような気持ちにさせられるのです。

田中実理論の困難のもう一つは、その「カウンセリング性」です。田中理論の面白さの一つは、語り手の（＜語り手＞？）の自己表出を、読者が聴くということ、つまり、＜語り手＞がクライアントで、読者がカウンセラーになるという発想です。読者がクライアントになり、小説を読んでスッキリする、というようなことは言われてきまし

たが、それを逆転して見せました。

同じ図式を、田中氏と私とにあてはめたいくなるのです。つまり、田中氏がクライアントで、私がカウンセラーになった気分になるのです。田中氏の、よくわかるようでわからない、しかも魔力に満ちた言葉は、まるで、フロイトのところにやってくる、魔的な夢を見た女クライアントのようです。私は、そのことばに引き込まれ、翻弄されます。そして、否応なくカウンセラーの位置に立たされるのです。カウンセラーは基本的に、クライアントの言葉を否定しません。また自分の言葉にも置き換えません。相手の言葉をオウム返しすることが基本と考えられています。カウンセラーである私は、クライアントである田中氏の前で、自分の言葉を失っていくのです。

#### 4. 鉄の部屋から鉄の檻へ

カウンセラーのやるべきことは、実はオウム返しではありません。傾聴することです。

「情動調律は形式を共有する模倣とは違い、相手の行動の背後にある主観的状态（情動）に焦点を合わせます。」（丸田俊彦（1992）『コフート理論とその周辺—自己心理学をめぐって』岩崎学術出版社 p.163 一部改変）

カウンセラーは、クライアントの言葉を模倣するのではなく、相手の情動に焦点を当てその情動と共振させようと努めることです。そうすると、カウンセラーから出てくる言葉は、自分の言葉になっているはずなのです。

クライアント田中氏の前でカウンセラーとして向き合う私たちは、自分の言葉を失わないために、田中氏の理論の、あるいは、田中氏の情動と共振しようとする、その過程で、自分の口から思わずこぼれ出た言葉を自分で拾うことが、本当の戦略だと私は考え至りました。

私には、二つの「鉄の部屋（檻）」があります。（鉄の部屋）

「たとえば一間の鉄部屋があつて、どこにも窓がなく、どうしても壊すことが出来ないで、内に大勢熟睡しているとすると、久しからずして皆悶死するだろうが、彼等は昏睡から死滅に入って死の悲哀を感じない。現在君が大声あげて喚び起すと、日の覚めかかった幾人は驚き立つであろうが、この不幸なる少数者は救い戻しようのない臨終の苦

しみを受けるのである。君はそれでも彼等を起し得たと思うのか」と、わたしはただこう言ってみた。すると彼は「そうして幾人は已に起き上った。君が著手しなければ、この鉄部屋の希望を壊したといわれても仕方がない」

そうだ。わたしにはわたしだけの確信がある。けれど希望を説く段になると、彼を塗りつぶすことは出来ない、というのは希望は将来にあるもので、決してわたしの「必ず無い」の証明をもって、彼のいわゆる「あるだろう」を征服することは出来ない。そこでわたしは彼に応じて、遂に文章を作った。それがすなわち最初的一篇「狂人日記」である。」（魯迅（1923）井上紅梅訳『呐喊』原序 青空文庫

[http://www.aozora.gr.jp/cards/001124/files/42933\\_31543.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/001124/files/42933_31543.html)

（鉄の檻）

「禁欲は修道士の小部屋から職業生活のただ中に移されて、世俗内的道徳を支配しはじめるとともに、こんどは、非有機的・機械的生産の技術的・経済的条件に結びつけられた近代的経済秩序の、あの強力な秩序界を作り上げるのに力を貸すことになったからだ。そして、この秩序界は現在、圧倒的な力をもって、その機構の中に入りこんでくる一切の諸個人一直接経済的営利にたずさわる人々だけではなく一の生活のスタイルを決定しているし、おそらく将来も、化石化した燃料の最後の一片が燃えつきるまで決定しつづけるだろう。

（中略）

バックスターの見解によると、外物についての配慮は、ただ「いつでも脱ぐことのできる薄い外衣」のように聖徒の肩にかけられていなければならなかった。それなのに、運命は不幸にもこの外衣を鋼鉄のように堅い檻としてしまった。禁欲が世俗を改造し、世俗の内部で成果をあげようと試みているうちに、世俗の外物はかつて歴史にその比を見ないほど強力になって、ついには逃れえない力を人間の上に振るうようになってしまったのだ。」

（ヴェーバー、マックス（1920）大塚久雄訳（1989）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店 pp. 364-5）

魯迅は、鉄の部屋を出てもまた鉄の部屋に閉じ込められてしまうことを知っていました。

「魯迅の世代の中国の知識人は、そうではなかつ

た。大部分の人は、歴史の激流が麗しい未来社会に向かって、怒濤の如く流れていくと、堅く信じていた。だからこそ、容易に共産主義を受け入れたのである。

魯迅のような人だけが、信頼と懐疑を相半ばに抱いていた。彼の芸術における独創性は、一面では、将来のための地慣らしであったが、一面では、その時点での焦慮を表していたのである。この独特な焦燥感こそ、まさしく魯迅の作品のかけがえのない部分である。ところが、ポストモダンの言説には、いかなる焦慮も爪の垢ほどもないのである。」（李欧梵（1992）「『鉄の部屋からの呐喊』に関する再考」中国研究月報 46(3)）

近代への希望と近代への絶望はすでに近代が本當の姿を表わす20世紀初めにははっきり意識されていきました（見えている人にとっては）。その中で近代小説が生まれたのですから、近代小説が何をどう描こうと、この希望と絶望から無縁ではられません。

同じことは教育にも言えます。近代教育が近代への希望に向かうことを制度付けられた時、絶望へと向かう道になったことは明確です。

私たちは、近代社会と近代学校の中で、希望と絶望によって、自己がさらなる分裂を被ることになります。それは、希望に向かう意識と絶望に向かう無意識とへの分裂かもしれません。意識しているかいないかにかかわらず。近代小説の登場人物も語り手（<語り手>）も作者も読者もそのことでは同じでしょう。教室の中の教師も学習者もまた同じでしょう。

そのような中で、文学教材の授業は、文学教育はなにができるでしょうか。なににもできない、ということから始めなければならないのではないのでしょうか。

詳しく言えば、文学は徐々に現在の教育制度から退場していくことで、その力を取り戻す道を歩むべきではないのでしょうか。別の言葉で言えば、文学の持つ希望と絶望への見えを使って、現在の教育制度を、“文学”が変えていく道を歩むべきではないのでしょうか。

（この論文は、2014年8月に行われた日本文学協会夏期研究集会シンポジウムで配布されたCDROM資料を再掲したものです）